

短歌

背影

後藤安延

ソロモン海域に激戦つどく

華々しき戦果は止みて絶ゆるなき死闘の連続に突入らむとす

雨雲のひくくしおほふ街辻にガダルカナル島爆撃を叫ぶラジオは

一島嶼の争奪に賭す戦鬪の悽愴にして銃後を衝てり

『海ゆかば水漬く屍』の曲辻々にあふれ夕日のかぎりなくあかし

地下道をいでてあたらしく仰ぎ見たり燈下管制下の街おほふ星

東天に燃えこぞる雲のいろ紅く民心うつすこの朝明けは

春の具象

春萌す地界に竹ちて何思はむ夕棚雲の漂ふ空を

戦線より歸りて

後藤夷承

私はこの七月三年八ヶ月振りで歸還したものであります。舊冬十二月八日丁は度ソ聯國境線に居りましてあの宣戦の大詔を拜聴致しました。畏れ多くも

『天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ明カニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス』と雄々しき大詔の煥發せられた一瞬何人も等しく、大和民族としての最大の感激を覺へたのであります。この日陸、海、空軍は一齊に敵の根據地を叩き、海軍の如きは八日未明に早くもハワイ軍港奇襲作戦に成功し、大艦隊を見事海底に葬り、或は開戦數旬にして東亞の牙城たるシンガポールを陥落せしめ陸に海に、空に連戦連勝を拍したる事實は諸君の最も周知の處であり、世界人類の等しく驚歎したる處であります。「ABCD包圍の重圍に陥ちいりしアジアの千早城とも云ふべき吾

腐物より蛾の類多く宙にたちとどろきひらく春を具象す
翹りすくおどおどしたる態ながら生れたるものはすでに主張す
限りなく生れつつあらむ芥より羽虫飛びたつ午後四時すぎ
轉生輪廻の理も極く自然なり春は生れゆきかぎりなく殖ゆ
菓屑を歩廊にさらふ旋風あり鶯谷にわれは降りたつ
眼の前の一角にあく空ひくし帝室博物館は櫻のなかに立つ
ひろらなる檻のなかにあり見つつゆく狐狸おのおの、体臭異ふ

決戦下陸軍記念日

遅しく踏みゆく隊列は次々に路面の星條旗の上に濃き影をせり（街
頭行進）

けふ晴れて光あたらし舉りたつ一億のいのち直にま向ふ
國土に春たつけふをかぎりなし撃ちてし止まむ鼓笛ぞびびく
四列の隊曲りゆく内側の旗しばらくは足踏みてをり
西空に一機飛びゆく音ふかく陸軍記念日のけふを暮れゆく
油にても炒るにほひつつましく厨べにありわれは腹這ふ

が帝國がよくその鐵檻を絶ち切り逆封鎖を以
つて敵を孤立のやむなきに至らしめたるは、
實に皇軍將士の善謀と盡忠報國に燃ゆる大和
魂の權化であります。今や一億同胞の胸に
は「七生報國」の精神が高々と浪打ち、加藤
少將の如き、或は眞珠灣九軍神の如き第二、
第三の軍神が續々として續いてゐるのであり
ます。然しながら!! 私に歸還した只今、先
づ以つて諸君に訴へたき事は統後國民の戦争
意識と、宗教運動の不活潑なる二點であります。
戦線の將士は死を賭して戦ひ、死して尙
足らざるとしてゐるにも不拘銃後の一部に於
て不正行爲闇取引が行はれ、或は戦争終局の
早からむ事を望む者のある事など誠に慷慨に
堪へざる次第であります。

又時代の流れにより各部門に新体制が生れ
活潑なる運動が開始されてゐるにも不拘、時
代の先覺者たるべき宗教家が只黙々として一
般社會の後方に追隨し、今や宗教は無用の長
物として社會から輕視せられ、敬遠せられ、
その勢力と威信は全く損失してゐるのであり
ます。何がかくせしめたか、實に宗教家それ

杉の秀の鋭きが截る宵空にうつろひはやし一片の雲
崩崖へくぎりて徹る月光に胡蝶花の葉はぬらぬらと光りいだしぬ
吹きあてて風遠ぞきし暫くを眞夜の風鈴のあはれ鳴りつぐ

中村貫一

みかへれば夢のごとくにかすみたる身延の山の八重櫻かな
何氣なく手折りてみたる野の花にかをりのなきをさびしと思ふ
日の本は櫻花咲く頃と成りぬ青海原日に輝きて

櫻

清野清資

岩ヶ瀬にしだれ櫻の光り散るこの幽寂けさよ祖國戦へり
朝の陽に艶う櫻を觀つゝありてフツト思へり熱田島の雪
満開の花の香りに室をいでしはしたどすむ月夜の庭に

自身の社會的運動の衰頽によるものと信じて疑ない。

見よ!! 光輝ある佛教史の歩みを。大和の精神を継糸とするならば佛教を横糸として織出されたのが即ち絢爛たる大和錦ではないか苟しくも彼等に宗教を無用の長物として輕視し敬遠するが如き思想を斷じてもたらしめてはならない。それには吾等宗教家が自ら覺醒すると同時に不惜身命の献身的努力を國家社會に捧げねばなりません。

『汝の敵を愛せよ』とはキリスト教の教へである。然るにキリスト教國たる米英が病院船をおそひ或は在留日本人に殘虐非道を與へたるに對し、佛教の國たる日本皇軍が敵國住民をいたはり、敵の捕虜を優遇してゐるその一端を見ても如何に佛教の教義とキリストの教義に差異があるかを知る者であります。

青年學徒諸君よ!! 時局は諸君の修學を鶴首して待つてゐるのだ。然してこの卓越せる廣大無邊な佛教を持つて共榮圈内の思想統一に南方民族の指導に死力を盡して働かねばなりません。

想 念

跋ひく白き小犬のうしろ影月夜の辻に消えぬ寂しき
贈るとて一枝手折りしこの花の匂ひ漂ふかなしき思ひす
髻髪をふりつゝ唱う題目の清けき聲にふれし心ぞ
木立深き叢處のあたり音たつは蟻の群らし幽けき思ひす
この星よあの星座よとのたまひし師の君を想ふ今宵も庭に
諸々にかまけしものよわづらはしき一日終へてまた讀經にひたる

意 氣

たどす時おごそかなりし顔容にきほひし君よ征きて幾日ぞ
大地圖のほだしとかれる曉を迎へんとするも血の湧く覺ゆ
オリオン座あれよと指せば身をよせて應へつつ君はひたむきに見上ぐ
胸ぬちにはぐくまれ來し吾が祖國の崇き誓ひに生きんとわれは
風に靡くしだれ櫻は生くるごとしフロリダ島沖の報を聴きつゝ

宗祖の「一切の大事の中に國の亡びるは第一の大事なり」とは千古不磨の金言であります。

今や米國は本土空襲を直指し大東京の模型を作つて盛んに爆撃の猛訓練をやつてゐると聞く。銃後同胞諸君!! 防空、防諜は銃後の責務であります。前線將士の苦闘を想起し眞に百年戦争を決意し、吾が家を、吾が郷土を、吾が國土を護れ。

見よ!! あの滿載して驚進する列車を、レールは決してコンクリーで固めてはない、小さな玉砂利一つ一つがよくレールを護つてゐるのだ。銃後の吾々一人々々がこの玉石となり、北緯五十度の線より南方四十度に亘る大東亞のレールをしつかりと護り、然して勇猛果敢な皇軍勇士に驚進してもらはねばならぬと絶叫して降壇する次第であります。

(昭和十七年十月二十六日 秋季雄辯大會中學五年選出)